

## 「山本泰次郎聖書講義双書」の編集について

双書編集のきっかけが何であったか、またいつごろのことであったか、今になっては記憶も定かでないが、私個人としては、山本先生のお許しを得て、「聖書講義」の巻頭言を何らかの形でまとめ一冊の本にしたいという考えは長いこと心の中にあつた。

一九六五年七月先生が心筋梗塞で倒れたとき、あるいはもう雑誌は続けていただけないのではないかと恐れたが、私は病床の先生に、何とかして巻頭言だけでも雑誌を続けていただきたいとお願いしたことを覚えている。幸い先生が軽快せられ、その後は福田秀雄兄の全面的応援を得て、「聖書講義」は現在まで休むことなく続刊されている。読者のひとりとして感謝にたえない。私が先生に巻頭言だけでもとお願いしたのは、先生の巻頭言（信仰所感短文）には私共の心をその奥底から、靈魂をその内奥から深く深く慰めるものがあり、私はそのことばにどんなにか慰められ、どんなにか力づけられてきたからであつた。少くとも私は、この種の慰め（キリストの福音の慰め、というほかに説明のしようがないが）を与えてくれるものを、内村先生のことばを別にして「聖書講義」の巻頭言以外に知らない。この度双書にこの巻頭言を収めることができたこ

とは、以上のようなわけで、私個人としては実にうれしく、心から感謝している。聖書講義を主とする双書であるので、これを別巻とし、また編集の都合上結局最後の二巻となったが、内容的には、この二巻は「聖書講義」誌の体裁と同じく、双書の冒頭に置かるべきものであると思つている。

巻頭言と言つたが、時期によつては巻頭に限らず信仰所感とでも呼ぶべき短文が、「聖書講義」の一九三四年九月創刊号から一九七六年十二月第三七八号に至る四十二年間に、約一六〇〇篇に達する。双書にはこの中からほぼ半数に当る八〇五篇を選び、一九三四く五七年の分を上巻に、一九五八く七六年の分を下巻に、それぞれ収録した。はじめは項目別に編集する積りでいたが、途中で方針を変更して年次別とし、項目は索引で見出しうるようにした。

項目別を年次別に改めたのには理由がないわけではない。先生の信仰所感は信仰と人生の万般にわたつてはいるが、必ずしも広く多様であるわけではない。むしろ一つの問題をくり返しくり返しくりあげて論じておられるのが特徴と言える。そこで項目別に編集するより年次別に編集して、先生が何に重点を置いておられるかが自ずと明らかになるようにした方

が適當であると考えた。編集が拙なために必ずしもこの意図が完全に達せられたとは言えないが、それでもこれを読む者は、先生がくり返し表白し、幾度となく証言しておられる事柄が、すべて福音の根本問題、信仰の中心問題に関わるものであることを読みとることができよう。なお索引には表題聖句索引もつける予定なので、読者はこれによって、先生がいかにか深く深く聖書を読んでおられるかを知って、聖書を読むということについて大きな奨励と教示を受けるにちがいない。

## 二

別巻はこのほかに「信仰論説集上・下」と「内村鑑三論集」とから成る。

「内村鑑三論集」には、先生ご自身の強いご希望もあつて、まず旧著「内村鑑三の根本問題」を収めた。これに「聖書講義」に掲載された内村に関する諸篇と、教文館版内村全集全五十七巻の各巻に付された解説の中から五篇とを併せ収めた。先生が内村について書かれたものうち、「聖書講義」に載せられたものはほぼすべてが収録されているが、解説の方はそれだけで大冊をなすであろうぼう大なもので、ここに収めたものはその一例にすぎない。ただし内容的には、この五篇はいずれも先生の独自の内村論が大胆明瞭に展開されている、代表的なもので

ある。

序でながら、本巻に収められた「内村鑑三の根本問題」が、本巻所収の各篇と内村全集各巻の解説とによって更に拡げられ、深められ、つきつめられて成ったものが、東海大学出版会発行の「内村鑑三」の「信仰篇」である。ここに山本先生の内村像のすべてが刻明に刻まれているが、残念ながらこの双書に収めることはできなかったので、双書の読者がぜひとも併せ読まれることを希望したい。

「信仰論説集上・下」はいずれも、「内村集」と同じく、六〇〇頁を超す大冊になつてしまつたが、それでもかなりのものを割愛せざるを得なかつた。しかし主題はキリスト教の根本問題から、人物や時事に至るまで多岐にわたり、じゅんじゅんと説き去り説き来つて読む者をして巻をおかせない。恐らくこの双書の中でも、読者を信仰の實際面で裨益すること最も大きい巻であろう。

下巻のさいごに「著者の信仰生涯」と「聖書講義」という項目がある。これは先生がご自分の内面の歴史を折々に語られたものだが、ここでも先生は一つのことをあくことなく、くり返し語っておられる。この項目に該当する諸篇はほとんどすべて収録したので、これにいま「キリスト教図書」に連載中の先生の「思い出すことども」を併せ読めば、読者はここに先生の信仰生涯のほぼ全容を窺い知ることがで

きるだろう。

ところで、この度の双書には「聖書講義」の中の「東京だより」は全く採録することができなかった。これは聖書講義双書という性格からということもあるし、分量のこともあつて入れなかつたので、読者のご諒承を得たい。「東京だより」は先生の個人消息にはちがいないが、それ以上に、福音信仰に基づく広い視野と、確かな見識と、深い洞察とによって潔められ、高められた信仰的日常生活の記録である。先生の真に霊的な聖書講義は、この真に常識的な信仰に支えられている。

### 三

双書編集のきっかけは先に述べたように必ずしもはっきり覚えていないが、具体的にはキリスト教図書出版社のオカノさんから「山本先生の聖書講義はこれまでどの書についてのものがあるか、どの位の分量になるか、ちよつと当ってみてくれませんか」と声をかけられたのが、その第一歩であつたことは確かである。私はまさかオカノさんが山本先生の本を早急に出版してくれるとは思わなかつたが、とに角早速にしらべて簡単なリストをオカノさんに渡した。出版のことが具体化したのは一九七四年に入つてからで、オカノさんと何回か打ち合わせた後、二月のある冷雨の降る日、東名バスでオカノさんと

一緒に静岡の岩辺さんを訪ねた。

岩辺元子さんはオカノさん旧知の誠実篤信な婦人で、この双書のタイプ印字係である。この時以来三年余、岩辺さんは終始変らぬペースで黙々とタイプを打ち続けていて下さる。八〇〇〇頁およそ六百万字にのぼる、この双書の一字一字は全部岩辺さんの手によつて印字されたものである。そのご努力に対し感謝なきをえない。

私じしんは当初この双書がこんなに大きなものになるとは考えていなかった。それがこのように先生の聖書講義のほとんどすべてを収録するようになったのは、全くオカノさんの判断と企画による。ヨハネ伝などは前半で一応完結していたものに、オカノさんの発案で、後半も先生にお願いしてこの双書のために新たに稿を起していただいた。印刷の仕事のことは私にはわからないが、ほとんど毎巻五〇六〇〇頁になる大きな本を、他の単行本を間にはさみながら、隔月に出版するということは大へんなことである。これを奥さんだけを手を相手に装本から発送に至るまで全部を独力でやっておられるオカノさんは、まさに超人的である。そのご努力に心から感謝するとともに、私個人としては、オカノさんの編集者としての私に対する不断のご激励を大へん有難く思っている。

さて、かんじんの本巻十巻、聖書講義の部分の編

集であるが、これはまことに容易であった。それは先生があたかもこの時のあるかのように、実に整然と毎月の雑誌編集をしてこられたので、私はただ各書ごとにそれをまとめさえすればよかったからである。しかも原稿には先生がご自分で全部目を通し、丹念に朱を入れて下さった。

一、二覚えとして書きとめておくと、第一に、先生の聖書講義はこれまでのものは、まとまっているものに関する限り、その全部を収録することができた。ただしガラテヤ書とエレミヤ書については、まとまった講義が複数あったが一つだけを収めた。断片的なもので収録しなかったものについては、各巻の編集後記にすべて列挙しておいた。従って聖書の直接の注解は本双書収録の各篇と、編集後記に挙げた各篇とで全部ということになる。

次に、現在「聖書講義」に連載中の「ピリピ書講義」と「黙示録講義」とは、これまでになかったものなのでぜひ双書に入れたいところだが、残念ながら間に合わない。他日を期したい。なお本巻の最終巻（第十巻、第十二回配本）には、先生がご自身で作製された著書目録を付した。

聖書各書の講義は大体において聖書の順序に編集した。（ただし第一巻の「ダビデ伝」とか、第十巻の「ガラリヤ問答」などは便宜上これによっていない）。従って年代的には全くばらばらなので、私は

読者が各講義のなされた年代にもご注意いただきたいと思う。最も古いものはもちろん先生の処女作である「ダビデ伝」で、一九三四年一月の発行である。そして最も新しいものは「詩篇」と「ヨハネ伝」で、いずれも一九七五年末に終わっている。（「詩篇」の後半はその後にこの双書のために書きおろされた）。この四十年間のほぼ真中にあたる一九五三年十二月に出版されたのが「使徒行伝の研究」である。読者は「ダビデ伝」と「使徒行伝」と「詩篇」または「ヨハネ伝」とを年代順に通読してみると、その講義の精神と目的は全く変わっていないにもかかわらず、その方法と進め方は一定の方向に向ってはつきりと変化していることに気付かれるであろう。

#### 四

さいごに、一つだけ個人的な感想を申し述べることをお許しいただきたい。

読者も既にお気付きのように、この双書は本としては全体にいかにもシロートの作った本という印象をまぬがれない。私の編集、仮名づかいの統一、割付け、校正その他をはじめ、こういうことを言うのは大へん失礼だが、オカノさんの印刷、製本、あるいは岩辺さんの印字とて決して熟練者のそれと違うわけにはいかない。このことは読者に対してはもちろん、何よりも山本先生に対してまことに申しわけ

ないことと思う。先生の「ダビデ伝」旧版をお読みの方は、それが内容ばかりでなく、本としての体裁の細部に至るまで、どんなに細心慎重な心配りによつて出来ているかに感嘆されたことであろう。

その先生が、この双書の出来ばえに対して喜びと感謝のお言葉をお聞かせ下さることはあっても、不満と批判のお言葉をもらされることの皆無なのに、私は編集者としてただただ恐縮するばかりである。思うにこれは、先生がもはやそのようなことに気付かれない程に、ただ聖書の真理を伝えることに一所けん命であられるからなのである。そのような外側のことを忘れ去ってしまった程に、ただキリストの十字架の福音を宜べ伝えることに心を砕いておられるからなのである。先に先生の聖書講義の方法の変化を指摘したが、その変化は一に「人のためにする伝道」（内村先生の「伝道の精神」参照）へと向っているのである。先生の講義が激しく、厳しく、鋭いにもかかわらず、懇切丁寧をきわめるゆえんである。そこには読者に対する深い、温い愛があられている。

私は、先生のご好意に甘えてはならないと戒心しつつも、この福音の愛に全く安心して、双書編集の仕事を進めてくることができた。編集の下手際については幾重にも読者のご海容を乞う次第である。

私は山本先生と先生の「聖書講義」によつて、聖

書を読むことを学び、内村鑑三とそのキリスト教を知り、真の福音信仰へと導かれた。そして二十有余年、山本先生と先生の「聖書講義」によつて、福音に慰められ、信仰を養われて、神とキリストとに生きてくることができた。いま、まことに拙いながら、先生の「聖書講義双書」を編集することを許されて、先生に対する私の感謝の一端をあらわしうること、そしてこれを通して先生の伝道事業の一端に携わりうることを、心から感謝している。

（一九七七年五月七日記）

（所載）『山本泰次郎聖書講義双書』刊行案内  
一九七七年五月